横浜市小学校社会科研究会

６学年部会

研修会記録

第　７　号

令和７年２月１２日

横浜市小学校教育研究会
会長　　沼田　留美子
横浜市小学校社会科研究会
会長　　髙畠　聡
同　学年部長　　小池　智宏

【授業研日時】
１２月　４日（水）

【会　場】
横浜市立稲荷台小学校
横浜市立別所小学校

【稲荷台小会場】

授業者	小野寺　征也	先生（稲荷台小）
司会	茂木　大介	先生（いずみ野小）
記録	黒田　聖人	先生（山元小）

【別所小会場】

授業者	渡邉　亮太	先生（別所小）
司会	高森　太郎	先生（大鳥小）
記録	三原功士郎	先生（間門小）

【授業者　小野寺　征也　先生（稲荷台小）】

１　提案内容

単元名「新しい明治の国づくり　～日本の近代化に迫る！～」

２　授業者より（自評）

・前年度の子どもたちの様子から、授業が楽しいと思える学習にしたいと考え、単元を作った。
・渋沢栄一は学習指導要領にはないため、どのようにつなげるか悩んだ。
・注目児のＢ児の活躍が見られた。ネットの情報をそのまま使うのではなく、もっと分かりやすい伝え方をしたり、根拠のある資料を用意したりするように声をかけたことが、本時の姿につながった。
・楽しさを優先してしまうと、学習問題とのバランスが取れなくなってくる。本時の入りが広すぎて、ゴールがあいまいになってしまった。
・多角的に捉えるために、単元や本時の流れ、資料提示がどうだったか聞きたい。

３　協議会

【質疑応答】

・渋沢栄一の音声をあのタイミングで流したのはなぜか。
→意見が出尽くして煮詰まったような気がした。気分転換になればとも思った。子どもたちの発言から、何となく渋沢栄一の真意に気付いていた。関連した発言が出たときに聞かせてもよかった。
・今日の授業に点数をつけるなら１０点中何点か。また、Ｂ児にとっては何点か。
→７点、Ｂ児にとっては４点。考えが広がらなかった。

・満足度が高そうな児童は？
　→分からない。

【グループ協議】
＜材について＞
・渋沢栄一というタイムリーな人物を扱ったのはよかった。
＜資料について＞
・音声で関心をもたせることができた。⇒渋沢栄一がいたという実感がもてる。
・音声資料から抜粋して、欧米に負けない国づくりを目指したことを捉えていた。渋沢栄一の業績と関連付けて考えられるとよりよかった。
・子どもたち一人ひとりが資料をもっていた。この資料を、本時の学習問題とどうつなげていけるのかが課題。追究しすぎてもずれてしまう。
・子どもたちがよく調べていたからこそ、音声資料は必要なかったのではないか。
・大きな年表などを用意し、それぞれの資料を全体共有しやすいようにしておく。
＜教師の出について＞
・子どもたちが資料を出したり、意見を言ったりしたときに、問い返しをすることで学びが深まるのではないか。

＜講師の先生より＞
【教育政策推進課　指導主事　松本 進　先生】
・子どもたち同士の関係、子どもと先生の関係がとてもよい。
・ロイロノートで考えを共有していて、ICTの活用もとてもよかった。
＜単元について＞
・調べ学習は積み重ねである。歴史学習において、調べるときりがない。最初にどう調べたらいいのか学び、その後の積み重ねを繰り返し、調べ方を考えていく。
＜材について＞
・渋沢栄一という人物を取り上げるのは難しい。埼玉県の道徳で取り上げられているが、知識がないと学ぶことが難しい。学習指導要領で取り上げられている人物にはそれぞれ意味がある。
・経済の視点は４、５年生で学んでいる。そこと関連付けていくとよい。経済の学習は中３までないからこそ、６年生でも経済の学習をしておけるとよい。
＜本時について＞
・学習問題はインパクトが大事。「５００もの会社を作った」とするとインパクトがより大きいかもしれない。
・音声資料はインパクトがあるが、その資料によって子どもたちは考えを深めていくことは難しかった。
・「今にもつながるものがあるから」という発言は、「発展」を捉えられている。
・「政府は～」という発言は、「政府＝栄一」の業績が人々に与えた影響を考えることができている。

・インフラや銀行等、子どもたちが当時の状況を理解できていたかどうか。ロールプレイや同じ意見の違う言葉を取り上げ、理解し直す作業が必要かもしれない。

【瀬谷さくら小学校　校長　場家 誠　先生】

・クラスの雰囲気がとてもよい。
・研究会の意義を考える。⇒人の授業を見て、学び続けることが大切。
・指導案は誰が見ても分かりやすいようにする。本時、研究主題、視点に沿うように作っていく。
・質疑応答で出た「満足度」、理解度と異なり強制できない。子どもたちのありのままが出てくる。子どもに即した振り返りの仕方を考えていくとよい。
・普段はグループでの学習が中心で、今日は普段と違い、全体で学び合う学習だったため、満足度が低かったのではないか。
・子どもたちはよく話す。ただ、後半は先生がよく話していた。先生が引っ張る授業になってしまうので、先生はあまり話さない方がいい。
・最初にペアで話す時間があった。良し悪しはあるが今日の入りとしてはよかった。
・問題解決的な学習を目指すなら、本時の振り返りで次につながる問いを生み出していきたい。振り返りに「感想」＋「疑問」を書くとよい。

【授業者　渡邉　亮太　先生（別所小）】

1　提案内容

単元名「戦中から戦後へ　～青い目の人形と見る日本～」

2　授業者より（自評）

・大正時代の学習で、渋沢栄一と青い目の人形を扱った。戦争中の話をするときに、再び青い目の人形の話に戻り、想起させながら学習した。
・座席表に振り返りを起こし、意図的な指名を行ったが、発言する児童は限りがあった。座席表を活用した発言のいかし方を協議したい。
・「教育」の場面で盛り上がると想定していたが、そこが盛り上がりすぎたため、特高警察の話題に行くのが遅れてしまった。西前小の資料はあえて出さなかった。資料の内容や提示のタイミングを協議したい。
・「大人」というキーワードに注目させた。身近な大人も戦争の考えに巻き込まれていったことを考えさせたかった。
・本時目標「戦争の国民生活への影響」に迫れていたのかどうか、協議したい。

3　協議会

【質疑応答】

・意図的指名をした場面はどこか。
　→C13を意図的に指名した。青い目の人形をアメリカに見立てて「やっちゃえ」のような戦争中の空気感に話をつなげてたかったが、あまりつながらなかった。

【グループ協議】

＜意図的指名について＞

・相互指名ができる雰囲気がよい。「あの子のこういう意見が聞きたいな」と子どもが意図をもって指名できると、さらによい。

・相互指名では、ねらっている児童の意見が聞けないのではないか。

・「大人に言わされていた」の問題について、対立する意見を教師がピックアップして指名すると、もう少し早く「大人とは誰？」に至ったのではないか。

・意図的にグルーピングして、意見の違いを感じさせるのもよいのではないか。

＜資料の出し方（内容・タイミング）について＞

・資料を出すタイミングは教師のねらい通りだったのか。１つ目の資料提示をもう少し前段を短めにして、後半の話に時間を割けるとよかったのではないか。

・資料は小出しにせず、資料箱に入れておく。グルーピングのときにそれぞれの子どもが別々の資料を根拠にして話すとおもしろい。

・２つ目の資料「言いたいことが言えなかった」という点について、子どもたちがかなり捉えられていたので、出さなくてもよかったかもしれない。

・資料同様、教師の問い返しが重要。「大人って誰？」という問い返しによって、当時の世の中について子どもの思考が転換した。教師による問い返しの大切さを感じた。

・声に出せない児童の振り返りを共有することも必要ではないか。「近くの子と話してね」から新しい発言が生まれたのはよかった。

＜その他＞

・魅力的な材だった。

・青い目の人形に留まらない振り返りを書けていたところがとてもよかった。

・多くの子は調べたことをもとに話していて、これまでの積み重ねが感じられた。

・「何ページ見てください」と、みんなで確認しながら学習を進められていた。

・学習のゴールで、子どもたちの生活や社会の様子など「社会の状況」にフォーカスしていったことがよかった。

＜講師の先生より＞

【前関東学院大学教育学部こども教育学科　准教授　藤馬 亨　先生】

・社会科とは、自分と社会との関係の中で、どのように考えるとよいか、鵜呑みにせずに立ち止まって判断できる子どもを育てる教科である。

・自分たちの生活が、歴史を通してどんな意味があるのかを考えることは、6年生の歴史の学習をする上で大切である。歴史とは、歴史家と歴史的な事実の相互作用の間で捉えていくべきものであり。時間が経過していくにつれて、事実の捉え方が変わっていくものである。ただ暗記をしていたら固定的なものになってしまう。歴史学習を通して、過去に起きた事実の意味を考えられる子どもを育ててほしい。

＜本時について＞

・資料に年表が欲しかった。年表があることで、歴史的な事実と青い目の人形を巡る事実がどう結びついているのかが明確になる。青い目の人形に関する新聞記事は1943年2月。太平洋戦争が始まったのは1941年。この2年の間に何があったのか、歴史的な事実の流れとどう結びつくのか明確にするとよい。

・子どもは本音を言えていたのか。青い目の人形が現在も残っている事実についてふれてもよかった。

・人形を隠した金子先生先生の話の紹介

→自分が教えた子たちが帰ってきた時のことを考えると、この人形をどうしても壊すわけにはいかなかった。戦後、この人形が残っていることにホッとした。

＜「主体的に学ぶということ」について＞

・単元を見通す学習問題を成立することは重要だが、それを本当に子ども一人ひとりが追究したいと思っているのか。学習問題を子どもと一緒に「醸成する」ことが大切で、子どもが追究したいと思う学習問題をつなげる意識が必要である。

＜「対話的に学ぶということ」について＞

・根拠を持って意見を出せていたところはよかった。しかし、相互指名だけでは対話的ではない。Ａ君が話したことをＢ君がどう捉えているか（共感する、似ている、違う意見など）、相手の考えをしっかり受け止めた上で、自分の考えを伝えていくことが大切である。

・対話的な学びをすることがゴールではない。子どもが対話しながら関わる中で、新しい考え方に出会ったり、資質・能力が高まったりすることが大切である。

【星川小学校　校長　　五十嵐 玲　先生】

＜社会科で育てたい子どもの姿は何か＞

・「鵜呑みにしない子、騙されない子、思慮深い子」本単元は社会科を通して目指したい子どもの姿を考える上で極めて重要な単元である。教師自身が戦争や平和に対してどういう認識を持っているのか、そこが問われる。「こんな時代に生まれなくてよかった」という無責任な発言が出るような単元にしたくはない。

＜本時について＞

・防空壕に入る、空襲の記録など、興味をもてるようにする様々な入り方がある。

・子どもたちは淡々と話をしていたが、どの立場で話をしていたのか。問題意識の深さはどこにあったのか。

・「親を殺されたからアメリカが憎い」「どうして大切な人形を燃やさないといけないんだ」など、当時の人の立場を本気で考えられていたか。考えられていると「でも、」などの逆説が出るような話合いになったのではないか。

・学習の後、当時の社会を子どもたちがどう捉えたのかを知りたい。

・猪口小学校校長の短刀の話の紹介

→「鵜呑みにしない子、騙されない子の育成」という社会科の本質を捉えている。

文責　黒田 聖人（山元小学校）、三原 功士郎（間門小学校）